



**Data**

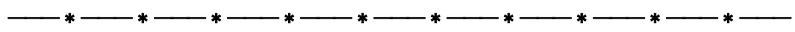
監督: デイミアン・チャゼル  
 原作: ジェイムズ・R・ハンセン『ファースト・マン ニール・アームストロングの人生』(河出書房新社)  
 出演: ライアン・ゴズリング/クレア・フォイ/ジェイソン・クラーク/カイル・チャンドラー/コリー・ストール

## 👁️👁️ みどころ

黒人歌手のルイ・アームストロングは知っているも、ニール・アームストロングは知らないのでは？また、ファースト・マン=First Manと言われても誰のことかわからない。しかし、人類ではじめて月面着陸をした男=ニール・アームストロングといえば、誰でも知っているはずだ。

宇宙船の中に座る主人公の姿を最新映像で見ていると、その大変さがよくわかる。また、宇宙飛行士の訓練が生半可じゃないことも……。しかし、今なぜそんな男の伝記(?)ともいえる物語が映画に……?

日本は今、小惑星探査機「はやぶさ2」による、去る2月22日の小惑星への軟着陸成功に沸き立っているが、それだって、“あの失敗”の上に成り立ったもの。すると、今からちょうど50年前、1969年のあの月面着陸の成功を、今どう評価？



### ■□■ファースト・マンって誰?それはアームストロング!■□■

本作は、原題が『First Man』なら、邦題も『ファースト・マン』。しかし、それだけでは、その「ファースト・マン」が誰のことかわからない。しかし、原作はジェイムズ・R・ハンセンが書いた『ファースト・マン ニール・アームストロングの人生』だから、ああなるほど。「ファースト・マン」とは、1969年に世界ではじめて月面着陸した宇宙飛行士「ニール・アームストロング」のことだとわかる。そう考えると、映画のタイトルにもちゃんと「ファースト・マン」に続いて、「ニール・アームストロング」の名前を入れてほしいものだ。

デイミアン・チャゼル監督は本作で、「ファースト・マン」ことニール・アームストロングの人生に肉迫したドラマを作りたいかったそうだが、英雄視されることを嫌ったアームストロング本人はずっと取材を拒否し続けたらしい。亡くなる直前にやっと伝記を映画化する許諾を取り付けて本作の制作完成に至ったわけだが、さて本作にみる宇宙飛行士ニール・アームストロ

ングの人間ドラマは？その本人役を演じたライアン・ゴズリングは「重要なのは月着陸に成功したことだけじゃない。技術の進歩、人類の発展のために命をささげる男たちがいたことを忘れてはいけない」と強調しているそうだが、さてニール・アームストロングとは一体どんな人物？

本作のチラシには「アカデミー賞最有力！」とあり、『『ラ・ラ・ランド』』デイミアン・チャゼル監督×ライアン・ゴズリング」と書かれている。たしかに、そのコンビで“柳の下の二匹目のどじょう”を狙った意図もわかるし、宣伝に莫大な費用をかけていることもわかるが、残念ながら本作の出来では、多分それはムリ・・・？

そう思っていたが、ノミネートされたのは録音賞、音響編集賞、視覚効果賞、美術賞の4部門だったから、私も納得。そして、本作の出来からすれば、その4部門なら受賞の可能性は十分あり！しかして、結果は、視覚効果賞を受賞！これなら私も納得！

### ■□■5Gは米中の競争だが、月面着陸は米ソの競争！■□■

2019年の今は、米中間で、一方では5G通信ネットワークシステムを巡るハイテク覇権闘争が始まっているし、他方では宇宙軍の創設まで真剣に検討されている。しかし、1950年代から60年代にかけての月への有人飛行競争については、ソ連がアメリカに先行していた。そのため“ソ連に“追いつき、追いこせ”とハッパをかけたのが、1961年に彗星の如く登場したジョン・F・ケネディ大統領だ。

しかして、本作はアポロ11号計画ではじめて月面着陸をなしとげたニール・アームストロングを描いた映画だが、アポロ計画の前には、ジェミニ計画があった。本作冒頭は、ニールがテストパイロットとして超高度音速飛行実験に従事している姿が映しだされるが、それを見ている私には彼が何をしているのかさっぱりわからない。また、そのテスト飛行が成功したのか失敗したのかもよくわからないから、緊張感の中で展開されるその導入部に私はイマイチ共感できなかった。また、本作にはやたら専門用語が多く、またやたら飛行訓練のシーンが多いが、私にはサッパリ！

そう考えると、本作は宇宙モノのドキュメンタリーではないのだから、技術面は大幅に省略し、物語性にウェイトをおいた方が良かったのでは・・・？

### ■□■ベトナム戦争とアポロ計画。双方とも国民の反対が！？■□■

1963年11月22日にケネディ大統領が暗殺され、ジョンソン副大統領が大統領職を引き継いだ。そのいきさつについては『LBJ ケネディの意志を継いだ男』(16年)で詳しく描かれていた。ケネディ大統領が始めたベトナム戦争の尻拭いにジョンソン大統領が大いに苦勞したのは周知のとおりだが、本作を見ているとそれと同じように、ケネディ大統領が熱中したアポロ計画に膨大なカネをかけていることにも国民から大きな不満が出されていたことがわかる。つまり、ジョンソン大統領はケネディ大統領が始めた「有人月面着陸計画」についても、その尻拭いをさせられたわけだ。

ベトナム戦争については結局有効な尻拭いができないままジョンソン大統領は1968年

に2期目の立候補を断念したが、アポロ計画については1969年に、ついに月面着陸に成功することに。ややすれば、成功するとそれまでの反対意見を忘れてしまいがちだが、膨大な国家予算をつぎ込むジェミニ計画やアポロ計画については、ベトナム戦争反対！並の反対運動があったことを忘れてはならない。

## ■□■ジェミニ計画とは？生き残りの道は？■□■

月面着陸をどうやって成功させるの？その試行錯誤の中で生み出されたのは宇宙船そのものを月に着・離陸させるのではなく、月の手前で宇宙飛行士は母船から小型船に乗り換えて月面に着陸し、探索終了後は再び小型船を母船にドッキングさせて、母船で地球に戻るという方法だ。しかして、本作中盤は、アメリカ航空宇宙局（NASA）の宇宙飛行士になったニールが、多くの仲間たちと共にこのジェミニ計画に邁進し続ける姿が描かれる。

その物語をみていると、多くの仲間の中でニールが最初からトップの成績だったわけではないことがよくわかる。当然優秀な人材から順番にさまざまな実験に投入されたわけだが、そこには失敗や悲劇がつきもの。さまざまな試練の中で優秀な人材を次々と失っていく中、たまたまニールがアポロ11号の船長になった時点で月面着陸が成功したわけだ。これは明治維新において、先行した吉田松陰や久坂玄瑞が早く死亡し、坂本竜馬も非業の死を遂げたが、長州藩の下っ端として働いていた伊藤博文や井上聞多（馨）たちが生き残り、明治政府の総理大臣や重要閣僚になったのと同じようなものだ。私は本作にそんな人間関係を巡るめぐり逢わせの妙をたっぷりと描いて欲しかったが・・・。

## ■□■宇宙飛行士と家庭生活の両立は？■□■

本作でニールの妻ジャネット役を演じたクレア・フォイは、1月12日に見た『蜘蛛の巣を払う女』で主役のリズベットを演じていた女優。『蜘蛛の巣を払う女』でもその演技力が光っていたが、本作でも彼女の演技が評価され、そのゴールデングローブ賞の助演女優賞にノミネートされている。本作は冒頭の超高度音速飛行実験のシークエンスに続いて、ニール・アームストロングの家庭生活が描かれ、一人娘が死亡する中、家族の絆をいかに保っていくのかが大きなポイントとされていく。ニールがNASA（アメリカ航空宇宙局）の試験に合格できたのは嬉しい限りだが、ニールがそんな過酷な任務に就けば、家庭生活との両立は不可能では？そんなテーマが浮上してくるわけだ。したがって、ジャネットにしてみれば、優秀な仲間たちが次々と失われ、その分ニールの存在感が大きくなっていくのは良し悪し。必ずしも望むものではなかったようだ。しかし、ついにニールがアポロ11号の船長に就くことになると・・・。

当然、夫はその任務に夢中。そのため子供に声をかけることすらできなかったが、そんな状況下ジャネットは夫にどのように接するの？また危険なミッションに従事している夫とヒューズトンとの通信をリアルタイムで聞いていたジャネットはある状況下でその通信が遮断されると、いかなる行動を？本作ではデイミアン・チャゼル監督はそんな夫婦のあり方にも大きなウェイトを置いているが、そのことの是非は？

2019（平成31）年2月15日記